

生活科における音楽の関わりについて[†]
—小学校教科「生活」の授業実践を通して—

新井 恵美*
宇都宮大学教育学部*

宇都宮大学教育学部教育実践紀要 第4号 別刷

2018年2月28日

生活科における音楽の関わりについて[†]

—小学校教科「生活」の授業実践を通して—

新井 恵美*
宇都宮大学教育学部*

本稿は、宇都宮大学教育学部で開講する小学校教科「生活」において筆者が音楽と関連させて実践したこととの報告及び、その実践の成果と課題を報告するものである。また、筆者の実践を小学校学習指導要領における生活科と音楽科との関連に視点を置き、評価し、平成29年告示小学校学習指導要領への対応に向けて、授業内容の改善点などについて考えることを目的とするものである。

キーワード：生活科、音楽科、小学校学習指導要領、小学校教科

1. はじめに

宇都宮大学教育学部で開講する小学校教科「生活」は、附属小学校の教諭をはじめ、様々の分野の大学教員が、それぞれの専門分野を生活科と関連させて授業を構築していくという、オムニバス形式の、大変ヴァリエティーに富んだ授業科目である。筆者もその中で数度授業を担当している。生活科を音楽科と関連させること、またその逆は、小学校学習指導要領においても要請されていることである。このことは、生活科では、「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」1 (3) に「国語科、音楽科、図画工作科など他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすること。特に、第1学年入学当初においては、生活科を中心とした合科的な指導を行うなどの工夫をすること。」とあり、音楽科では同1 (4) に「低学年においては、生活科などとの関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにすること。(後略)」と示されていることから明らかである。したがって、大学の授業科目においても、そのような視点を取り入れて授業を展開させることは大きな意義があるものと考えられる。

本稿は、筆者の行った授業実践を、小学校学習指導要領における生活科と音楽科との関連に視点を置き、評価し、平成29年告示小学校学習指導要領への対応に向けて、授業内容の改善点などについて考えることを目的とするものである。

2. 授業実践の概要

筆者は、本授業において、2種類の実践を行った。以下、それぞれについて紹介する。

(1) 音の旅

本実践では、普段何となく聞き流してしまっている身の回りの音を、立ち止まって注意深く聞くことにより、生活の中の音に関心を持ってもらうことを目的とした。授業のタイトルを「音の旅」とし、学内の音を自由に聞いてもらうことを中心に、授業を計画し、内容は、R. マリー・シェーファー『サウンド・エデュケーション』の課題1、14及び『音さがしの本 リトル・サウンド・エデュケーション』の課題1～5、13を参考に構成した。

具体的には、まず、導入として、教室内で3分間、目を閉じた状態で静かに音を聞き、それをリストアップする活動を行った。その際、後述する「他人の音」を意図的に作り出すために、筆者が教室内を歩き回ったり、板書をしたりした。その後、そのリストから、自分の（出した）音、他人の音を分類し、

[†] Emi ARAI*: Relationship of Music in Living Environment Studies

Keywords : Living Environment Studies, Music, Elementary School Curriculum Guidelines, Elementary School Subject

* School of Education, Utsunomiya University
(連絡先: arai@cc.utsunomiya-u.ac.jp)

また、大きな音から小さな音へ並べ替える活動をした。

こうして、本時の活動の趣旨を理解した上で、教室を出て、キャンパス内のフィールドワークを行った。

フィールドワークの際のルールは、(1) キャンパス内であれば室内、室外を問わずどこでも可とする、(2) 場所を決める時は、他の人から5メートル以上離れる、とした。これは、キャンパスの外へ学生が出ると、安全確保の面で難しいこと、また、友達同士で相談し合って課題を行うことを避けることを意図している。

場所を決めたら、そこで5分間静かに音を聞き、その音をメモする。メモする際は「○○の××する音」と、具体的なものや現象でもよいし、「○○の△△という音」という「△△」の部分に擬態語・擬音語を入れる形でもよいとした。聞き終わったら、教室へ戻るまでにきこえてきた音を忘れないようにし、教室へ戻り次第ワークシートを完成させる。

ワークシートの課題は4点で、(1) フィールドワークをした場所を、他の人がたどりつけるように分かりやすく書く、(2) その場所できこえてきた音を全て書く、(3) そのうち一番大きかった音、一番小さかった音、一番遠くできこえた音、一番近くできこえた音を書く、(4) 教室に戻ってくるときに自分と一緒に動いた音は何か、である。

(2) カズー作り

カズーとは、膜鳴楽器の一種であり、管にパラフィン紙やポリプロピレンフィルムなどを取り付け、それに向かって声を出すことで膜の部分が響くという構造の楽器である。これは、手作りでも簡単にでき、声という身近な音に関心が持てると考え、実践することにした。

学生にラップの芯などの筒状のものとセロハンテープを持参させた。膜の部分は、筆者がポリエチレン製ゴミ袋、トレーシングペーパー、コピー用紙といった身近なものを準備し、学生が自由に選べるようにした。作成の際には、膜の選び方、膜の筒への固定方法、声の出し方によって声の響き方がどのように変化するかを試すよう指示した。それらをワークシートに記入、提出させた。

3. 成果と課題

(1) 実践内容について

「音の旅」の実践においては、普段注意して聞くことのない身の回りの音をじっくりと聞く機会となったようである。例えば、木の葉の音などの自然音や、行った場所ならではの環境音などを聞き取ることができたり、自分と一緒に動いた音として、衣擦れの音や服のポケットに入れた物が動く音、エレベーターの音を指摘することができた。

カズー作りでは、筆者が準備した膜材のうち、コピー用紙では声が響かないことが分かったり、音の響きやすい膜材であっても、筒にセロハンテープを巻きつけるようにしたり、筒に密着させすぎたりすると響きに弱くなることが分かったりと、簡単に作れるものであっても、よく響くように作ることを考えると、様々な気付きが生まれてきたようである。また、声の出し方も、普段喋っている時の声よりも、歌う時のような声の出しの方がよく響くということに多くの学生が気付くことができた。

ここまでは、筆者が学生に指示したポイントに対する考察であるが、その他、音が良く響く方が分かって、学生が持参した筒のうち、レシート用紙の筒は小さすぎてどんなに工夫しても音が響かないことから、ある程度の直径を備えていなければならないのではないかという考察ができたり、トイレトペーパーの芯は、音は響くものの、素材が柔らかすぎるために、子どもにとっては扱いにくいのではないかと考えることができたりと、本活動を現場での実践に生かす際の注意点や工夫を考えることのできた学生も出てきた。これらのことを共有することにより、実践へ活用していく際の糸口もつかむことができた。

(2) 学習指導要領との整合性

これらの活動を現行の小学校学習指導要領に照らしてみると、以下のことがいえるであろう。

まず生活科の視点で見ると、「音の旅」では、内容(5)の「身近な自然を観察したり、季節や地域の行事にかかわる活動を行ったりなどして、四季の変化や季節によって生活の様子が変わること」に気付き、自分たちの生活を工夫したり楽しくしたりでき

るようにする。」が該当するといえる。『小学校学習指導要領解説 生活編』には、「身近な自然を観察するとは、実際に野外に出かけ、諸感覚を使って繰り返し自然と触れ合うことや、自分なりの思いや願いを持って進んで自然とかかわることなどである。そこには、視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚などを使って自然のすばらしさを十分に味わう姿が生まれる。」¹とある。本授業科目は、後期開講であることから、学生が聞いた音の季節は秋である。身近な自然や環境の音に関心を持たせるという意味で本実践は意味のあるものであったが、そこに「繰り返し」や「四季の変化」の視点を盛り込む必要があったと考えられる。当然、授業の回数は限られているため、本授業で繰り返しこの内容を実践することはできないが、現場での実践に生かすために、そのような方向に目を向けさせる働きかけを今後盛り込む必要がある。

カズー作りは、内容(6)の「身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりなどして、遊びや遊びに使う物を工夫して作り、その面白さや自然の不思議さに気付き、みんなで遊びを楽しむことができるようにする。」に沿ったものであるといえよう。使用した材料は、身近にある物であり、「この内容で特に大切にしたいのが、「比べる」「繰り返す」「試す」などの活動である。」²のとおり、膜材を選んで音の響きを比べたり、膜材を筒に固定する方法を試したり、どのような声の出し方をするとよく響くかを繰り返し試したりしており、現場にそのまま持っていける実践であったと考える。児童が活動できるものを授業で試してみることにより、教師側の視点でこの実践を見ることもでき、指導上の留意点にもいくつか気付くことができた点においては、意義があったといえるであろう。

しかしながら、いずれの活動も「音楽科との関連では、身近な自然を観察したり身の回りのものを使って遊んだりすることが、歌詞の表す情景や気持ちを想像して歌うこと、音の面白さに気付いて音遊びをすることなどに発展する可能性を持っている。」³のうち、「歌詞の表す情景や気持ちを想像して歌うこと」に至るようなものではない。特に、前者の活動においては、季節を感じる歌唱教材との関連を図ることが可能であると考えられ、そういった展開を考えていくことや、活用の方法を学生に考えさせるなどの方策を練る必要がある。

次に、音楽科からの視点に移してみたい。学習指導要領第1学年及び第2学年の内容のA表現(3)アには「声や身の回りの音の面白さに気付いて音遊びをすること。」とあり、「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」1(5)アには「音遊びや即興的な表現では、リズムや旋律を模倣したり、身近なものから多様な音を探し出したりして、音楽づくりのための様々な発想ができるように指導すること。」とある。生活科とは「身近な」点で類似する。筆者が実践した「音の旅」の活動も、カズー作りも、「身近な」自然音や環境音、また「身近な」材料によってできる楽器ということで、有機的につながっているものであるといえよう。前述したように、全社の活動においては季節による変化を織り込んでいくことで、より充実した音楽活動が可能になるのではなかろうか。

4. 新学習指導要領に向けて

平成29年3月、新しい学習指導要領が告示された。生活科では、「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」1(4)において「他教科との関連を積極的に図り、指導の効果を高め、低学年における教育全体の充実を図り、中学年以降の教育へ円滑に接続できるようにするとともに、幼稚園教育要領等に示す幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連を考慮すること。特に、小学校入学当初においては、幼児期における遊びを通した総合的な学びから他教科等における学習に円滑に移行し、主体的に自己を発揮しながら、より自覚的な学びに向かうことが可能となるようにすること。その際、生活科を中心とした合科的・関連的な指導や、弾力的な時間割の設定を行うなどの工夫をすること。」とされている。このことについて「音楽科との関連では、例えば、身近な自然を観察したり身の回りのものを使って遊んだりすることが、曲想と歌詞の表す情景や気持ちとの関わりについて気付くこと、音遊びを通して音楽づくりの発想を得ることなどに発展する可能性を持っている。」⁴とあるように、現行のものと同様の例示がなされている。

また、音楽科では、同1(6)において「低学年においては、第1章総則の第2の4の(1)を踏まえ、他教科等との関連を積極的に図り、指導の効果を高めるようにするとともに、幼稚園教育要領等に示す

幼児期の終わりまでに育ってほしい姿との関連を考慮すること。特に、小学校入学当初においては、生活科を中心とした合科的・関連的な指導や、弾力的な時間割の設定を行うなどの工夫をすること。」とされる。このことについては「具体的には、身近な自然、季節や地域の行事に関連する学習と関わらせて、音楽科で扱うわらべうた、季節や行事のうたの表現を深めるなどして、より広がりのある表現活動を楽しむことが考えられる。」⁵とあり、こちらも現行のものと同様の例示がなされる。

しかしながら、これまでと同じ実践を提供すればよいというものでもない。生活科と音楽科の関連はもちろんのこと、さらに幼稚園教育等や中学年移行への接続も考えていかねばならない。また、今後は、低学年においては生活科と音楽科相互の関連だけではなく、他教科も巻き込んだ包括的な学びも考えていかなければならない。音楽科は、多くの教科との関連が考えられる教科であり、そのような場を設定、提供していかなければならない。筆者がこれまで行ってきた実践そのものは今後も採用できるものとするが、そのアプローチの仕方、学生への提供の仕方をさらに洗練させる必要がある。当然のことながら、今回課題として挙げたことが充足できるような他の実践についても開発する必要がある。その点については、今後の課題とすることとし、本稿を閉じることとする。

参考文献

¹ 文部科学省『小学校学習指導要領解説 生活編』、2008、p.36、http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2009/06/16/1234931_006.pdf（最終確認：平成29年10月30日）

² 前掲注1、p39

³ 前掲注1、p51

⁴ 文部科学省『小学校学習指導要領解説 生活編』、2017、p.57、http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/afieldfile/2017/10/19/1387017_6_1.pdf（最終確認：平成29年10月30日）

⁵ 文部科学省『小学校学習指導要領解説 音楽編』、2017、p.108、http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/__icsFiles/

afieldfile/2017/10/13/1387017_7.pdf（最終確認：平成29年10月30日）

平成29年10月31日 受理

Relationship of Music in Living Environment Studies

Emi ARAI*

* School of Education, Utsunomiya University